

## ■ コロナ禍での教育



岸 本 一 蔵\*

去年の春よりコロナという言葉を書き物にはせめてコロナという言葉意識して使わないように…と心がけていた。一転、ここではコロナ禍での大学教育に関して書かしていただこうと思う。その理由はこの禍が始まって大学での教育も一巡し、その現状とその影響について少し整理し、知っていただきたいと思ったからである。

ご存じのようにコロナ禍が教育に直接影響し始めるのは去年、つまり2020年4月の新学期からである。この時期はさまざまな意味でコロナの正体が不明で、社会全体がきわめて慎重に対処する流れであったことから、同年の前期授業はすべての大学で通常の対面授業を行えなかった。代替としてとられた授業の形態は各大学でまちまちであり、当初はメールを使った学習内容の指示だけという所もあったようであるが、比較的早い段階でネットを使った授業へと移行が進んでいる。これは現在の教員のほとんどがすでに学生時代からPCに慣れ親しんだ世代となっていること、また授業への対応が担当教員自身で多くのことを裁量できることが大きかったからではないか。もちろんネットのインフラやPCの環境が整っていることも大前提であるので、これが20年前であればまったく様相は違ったことは疑いない。ネットを使った授業の配信方法は大きく分けて、教員が行う授業をそのまま配信するライブ型と、あらかじめ授業を録画した内容をダウンロードするオンデマンド型に分かれる。前者では、教員と学生が同じ時間帯にネットを通して繋がっているため一応双方向のやり取りが可能であるが、対面授業でのそれには遠く及ばない。一方、後者では当然双方向のやり取りはできないが、学生は時間帯を選ばず自由に受講することや、繰り返しの視聴が可能である点が特長といえる。形は違うが、授業の時間割も通常と同じく設定されており、教員が情報を発信して学生が

これを受け取る対面授業と一見本質的に変わりはないように思える。しかし、私は次の点において教育効果が大きく損なわれているのではないかと危惧している。一つは、学生の集中力の問題。ほとんどの方がWeb会議を経験されていると思うが、2時間程度の会議であっても結構疲れる。これに対し、学生は朝9時から1日平均3～4コマ(1コマ90分)の授業を画面を通して毎日同じ環境で同じ姿勢で一人で受けるのである。しかも会議とは異なりほぼ一方通行である。集中力を保つのは至難の業といえる。時どき画面を通して、学生に質問をするが対面授業のときよりも明らかに反応は悪い(もっとも対面授業の時には、前に座る真面目な学生に質問するので条件は同じとはいえないが…)。では学生が自分で受講時間を裁量できるオンデマンドではどうか?前述のように日中はほぼ画面を通して授業を受けており、それ以外の時間に更に画面に向かうことは必然的にハードルが上がる。また、「いつでも受けることができる」=「結局受けない」ことになりかねない。積み重ね型の形態をとる理系科目の授業では挽回不能な状況に陥る学生を生みやすいのである。そしてもう一つの問題は、演習やテストに対する学生の対応である。対面授業での演習は教員と学生間のやりとりは勿論のこと、学生間でのやりとりも容易でありこれが理解の助けに大変重要な役割を果たしているが、これがほとんどないのである。一方、テストでは悪い意味でのコミュニケーションがとりやすくなるわけで、テストに対する真剣さの程度が低下する。つまり、なんとなく「こなせる」という傾向が全般に強まっている。もちろん、繰返し学習が可能という点や通学時間が無くなるなどのメリットを生かしている学生も多いとは思いますが総じて学習全体の地盤沈下が避けられないのではと感じる。これが結果として現れるまでにはもう少し時間が必要であるが、私の憂慮が杞憂であればよいと切に願っている。

\* Ichizou KISHIMOTO : 本工学会理事  
近畿大学 建築学部